

カントが晩年書いた『人間学』の文脈において、「共生」というキーワードを考えることは意味深いことだ。

共生ということは今後、人類学を未来に向けて解き放とうとする際、確かにひとつの鍵となる概念なのだが、その力は今もポテンシャルの状態にとどまっている。その来し方を踏まえ、行く末に備えよう。

共生は、戦前から発生してきた日本語で、バブル経済崩壊後にこのことばを冠した多数の書籍が出版された。人類学では、狩猟採集民エフェと農耕民レッセの自然とのかわりが相互の共生を実現させているとした寺嶋秀明の『共生の森』。理想的社会へと至り得るオルタナティブな生の在り方を集めた竹沢尚一郎の『共生の技法』。グローバルな世界認識を身近な暮らしの変革に結び付けた渡部重行の『共生の文化人類学』などが著名であるが、人間と家畜との共生や、人間と機械との共生もある。ただこのことばが日本で育まれてきたればこそ、共生に相当する英語さえそれぞれの論者が手さぐりしている。

ひとつの対応語は *conviviality* である。もともと宴を意味するこの語彙は、人類学にも親和性が高かったイリイチが用い、また法哲学者の井上達夫が用いたため、共生といえは *conviviality* だと思ひ込んでいる研究者は多い。しかしそれは必ずしも正確ではない。

例えばその井上達夫に生物学的な意味での「共棲」とされてしまったことばが *symbiosis* である。確かにこのことばは細胞共生説が唱えられてから著名になった。けれどもそれ以前に精神的

人類の課題

人間学の キーワード

共生

Conviviality, Symbiosis, Living-together

飯嶋 秀治 九州大学准教授

共生として、フロムやユングも使っていた。

他にも *living-together* もある。これは生態学で用いられた一方結婚などの制度に裏付けられない同棲の可能性をあらわす文脈などで出てきた。R・バルトの晩年の関心がこの、ともに生きることであり、栗原彬もこれを対応語に選んでいる。co-existence もある。

こうした混乱が生じているのは、共生ということばが日本の土壌から発育し、のちにその対応語を、それぞれの論者が海外の著作に求めたことによるのであろう。もちろん、問題は混乱そのものではなく、この混乱をいかに学問的に生産的に解き放つかである。共生をわたしたちが語るとき、その背後には、この語を放ちたくなる「共苦」が暗黙裡に横たわっていたということであろう。世界の現実はその目前にある姿が唯一のものではなく、もつと別の在り方があり得るはずであり、あらねばならないと思わせたその課題こそが、わたしたちが人間学のなかでの共生を語り合う足場であろう。

冒頭のカントが青年期、論文で負かされたのがユダヤ人哲学者メンデルスゾーンであった。彼はプロイセン王国の言語と法制下で、ユダヤ人の生活世界を作る言語や法政策を諮問されていた。これがのちにドイツにおけるユダヤの共生問題となる。こうして想いを馳せるとき、わたしたちが今日生じているヘイトスピーチや外国人を国家に摂り込みながら社会的に排除する包摂的排除の在り方が、人類が何度も直面してきた課題であり、ならばこそ人類学がこうした課題を克服するため、世界のあちこちから知恵を集め得る人間学となり得ることを知るであろう。